

平成20年度 農林水産試験研究中間評価結果

番号	機関名	課題名	研究期間	研究内容・成果	総合評価	評価委員コメント	委員コメントに対する研究機関の回答・考え方
1	農業総合研究センター	戦略作物振興試験研究	H18～22	<p>【内容】 県では、能登大納言小豆、中島菜、金時草、ブドウ「ルビーロマン」及び源助大根を全国に誇れる特色ある品目として戦略作物と位置づけ、生産から販路拡大にいたるプロジェクト活動を実施している。本課題では、その一環として、源助大根を除く4品目について、生産技術上の課題解決を図る。</p> <p>【成果】 ・能登大納言小豆：有望系統「能系1」を選抜。刈り取り機及び収集脱粒機を開発 ・中島菜：標準系統より抽だい期が10日～2週間遅い2系統を選抜 ・金時草：夏季の着色向上対策として遮光が有効であることを確認 ・ルビーロマン：簡易な受粉法、摘粒・摘房の目安、収穫期の目安となるカラーチャートを作成</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> ・金時草、ルビーロマンはブランド作物の可能性を持っており、更なる研究に期待したい。大納言や中島菜はローカル作物であり、生産拡大ができない作物と整理する。 ・“戦略的”に研究、普及を進めていくべき。 ・個々の品種については成果が出ている。販売ルートの確保など、より戦略的な方策を考えるべき。 ・戦略作物の県の定義や位置づけ、販売方針も並行してブラッシュアップしていくことが必要（作物ごとに生産規模や価値に差があるので、販売スケールやターゲット層、価値のねらいどころが異なると思う）。 ・今後とも安定した生産と販路が期待でき、県も応援して欲しい。 ・ルビーロマンは実用段階に入ってきた。現場では、色、粒の大きさ等生産技術の向上が問題となり、ブランドが確立できるかどうか真価が問われる。しっかりと研究を続けていっていただきたい。価値ある本物を目指して欲しい。 ・ルビーロマンの今後に期待したい。 	<p>戦略作物として位置づけられた品目について、県では、需要とバランスのとれた生産をめざし、生産から販売に至る各場面で生じる課題に総合的に対応するためのプロジェクト活動に取り組んでいる。</p> <p>プロジェクトでは、この研究課題による技術開発のほか、産地における生産者の組織化や技術改善、販路の開拓、生産者と利用者による共同の商品開発等、品目ごとの戦略に基づいた活動を行っている。</p> <p>農業総合研究センターでは、今後とも、プロジェクト活動による関係機関・団体との密な連携を活かし、戦略に対応した研究開発に努めていくこととしている。</p>
2	農業総合研究センター	園芸作物品種育成研究	H18～22	<p>【内容】 伝統野菜で機能性を備えたブランド候補品目の優良系統選抜及び本県の気象条件に適した花き、果樹のオリジナル品種を育成する。</p> <p>【成果】 <伝統野菜> ・金系瓜：食味が優れ、外観がよい2系統を選抜 ・かもうり：色がよく、大果な1系統を有望系統として選定 ・大浜大豆：品質良好な8系統を選抜 ・金沢一本太ネギ：晩抽台性の2系統を選抜 <花き・果樹> ・フリージア：H19年3月に浅紫色の1系統を「フリージア石川 f 1 号」として品種登録出願 ・ナシ：40組合せの交配から973個体を作成</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> ・優良系統の選別はできており評価できる。フリージア以外にも県の代表的な品種を揃えるべき。 ・生産対象農家が少ない中ではあるが、これを機に生産拡大に繋がることを期待したい。 ・素朴な疑問だが、金沢一本太ネギに市販品種を交配、戻し交配してできたネギは金沢らしい。金沢一本太ネギとしての独自性があるネギとして提示して良いのか。 ・数量を多く生産すること、栽培が楽になることと、ブランド化する品種のもつ特徴や価値とのバランスが気になった。数を多くして流通を拡大することが適切なのか、希少さを独自性としてプラスに活用していくことが良いのか。 ・研究内容からみてコストがかなりすぎていると感じる。選定された品種に対して将来の伸びが、あまり感じられない。 	<p>地域伝統野菜は、生産者数、生産量など小規模なものがほとんどであるが、伝統野菜の生産・販売体制を整備し、地域の活性化を図ろうとする動きが活発化している。地域に埋もれた伝統野菜の中で、外観・品質・収量性などに優れた優良系統を選抜し、育成することにより、産地の育成・拡大を図ることは、地域の活性化につながるものと考えている。</p> <p>また、県オリジナル品種の育成は、市場競争力を強化し、既存産地の活性化・拡大や新産地育成など園芸生産の拡大に寄与するものとする。花きの新品種育成では、フリージアの色揃えを当面の目標とし、生産や消費動向を見極めながら新たな育成品目も検討したい。</p>
3	畜産総合センター	脂肪酸組成に着目した「能登牛」生産技術の開発	H18～21	<p>【内容】 「おいしい」と言われる「能登牛」の低コスト生産技術を確認し、他産地との差別化を図ることで、全国に通用するブランド肉を生産する。</p> <p>【成果】 米ぬか添加区は、筋肉間脂肪のオレイン酸含量が高かった。枝肉成績は差はなく、飼料費の軽減につながった。</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> ・項目を絞って研究を進めていると評価する。 ・米ぬか利用技術の確立とその普及が待たれる。 ・なぜ米ぬかが肥育に適しているのかについても科学的に説明できるように進めていただきたい。 ・飼料が高騰し、畜産農家の経営を圧迫する中、本研究テーマを含めた食品製造副産物の有効利用がさらに進むことを期待したい。 ・米ぬかを利用することで、脂肪酸組成の向上以外にメリットないのか、他産地の牛肉との差別化につなげられる工夫は何か、米ぬか利用により飼料代が低下した点について、この低下の度合いでどのくらい農家にメリットがあり、販売促進に利点があるのかについても具体的な説明があっても良かったと思う。 ・米ぬかの購入価格をどのレベルにおくかによって、入手不可の場合もあるのでその面の検討も必要。 ・コスト削減の努力を買いたい。生産農家の増加がカギ。 ・肉質の改善により、全国に通じるブランド肉となることは県民の望むところである。力のある肉牛開発を望む。 	<p>畜産経営は飼料費の負担割合が高く、昨今の飼料価格の高騰が畜産経営全体を圧迫している。このような中、飼料費低減による低コスト生産が経営改善に効果的であるため、今後は、米ぬかの給与量を増加させる等利用技術を確認するとともに、早期肥育技術による低コスト生産を検討していきたいと考えている。</p> <p>また、食品製造副産物の中で、米ぬかの調達は比較的容易で価格も安い、常温では劣化しやすいという短所があり、今後は米ぬかの品質維持方法の研究も実施する計画である。</p> <p>これまでの試験は米ぬかの脂肪酸組成に着目したものであるが、指摘のとおり米ぬかには、脂肪酸以外にもビタミンやミネラルが豊富に含まれており、このような米ぬかの機能性についても、給与方法の改善とマーケティングの場面で生かしていきたいと考えている。とりわけ農業のマーケティング手法は未だ未熟と言われ、一層の品質向上と併せて、消費者に喜んで食べてもらえる「能登牛」の生産に寄与する技術の確立を目指したい。</p>
4	水産総合センター	アカモク（機能性成分を有するホンダワラ類）の増養殖技術開発試験	H18～22	<p>【内容】 機能性成分を多く含むアカモクの養殖適正株の選択と培養技術及び養殖技術の開発を行った。</p> <p>【成果】 H18・19年度で採苗・幼体の生産が可能となった。また、19年度に早期株を用いて海洋飼育した結果、天然と同様の成長を示し、約10mとなり成熟した。</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的技術を確立したと評価される。 ・漁業（藻場造成）、養殖業両方にとってメリットがある成果であり、加工品の開発も含めると多方面に成果還元が期待されるので評価される取り組みである。 ・現実の海域における死亡要因がどの程度あるかを検討する必要がある。 ・アカモクの増殖技術を確立しつつある点は評価できるが、フコイダンの価値については、まだ未確定ではないかと思われる。 ・機能性成分の抽出、利用については用途は付いているのか（コストに見合うのか、県内業者で対応できるのか）。 ・本県での海藻類の増養殖は、ほとんど行われておらず、天然資源が減少する中、大変興味深い研究テーマである。 ・増養殖技術が確立されれば、他の海藻（網もずく、岩もずく）にも応用を期待する。 ・収入の部分が見えないので普及に関して見えてこないが、実需者にとっては欲しい素材であろう。 	<p>アカモクは、一年生の海藻で成熟・放卵後は自然に枯れていく。フコイダンの効用については、1996年の日本癌学会で「フコイダンの抗ガン作用の研究報告」が発表され、ガン細胞だけを自滅させる働き（アポトーシス誘導作用）のあることが判明している他、機能性を裏付ける多くの学会発表がある。アカモクの増養殖研究と機能性成分の抽出は車の両輪と考えており、フコイダンの抽出効率を高める手法の開発については県内の企業と共同でとり組み、昨年度、特許出願を行った。</p>